



今月の題字
木村聡介くん

(みどり市東町)

今年から9年制義務教育学校となる「あずま小中学校」に入学する聡介君は空き箱で車や船を作ることが好き。でも一番大好きなのは優しいお母さんです。

富弘美術館で企画展

『水温む』好評開催中!

みどり市東町に春の訪れを告げる花と言えば、山野では、梅やマンサク。庭先では、福寿草や水仙、田畑やあぜ道ではフキノトウやサンガイグサ、スマレやタンポポ。春の訪れとともに、凍っていた水は溶け、冬枯れていた野山は一面に芽吹き始めます。星野富弘作品にも、様々な春の花が描かれています。春夏秋冬の中で、春の花が最も多く描かれています。モチーフとなる花が多いことも理由ですが、一斉に芽を出し、花を咲かせるこの季節は、「大地の生命



力」と自らの「生」への喜びを感じることのできる時なのでしょう。添えられた詩文からも、花を愛でる気持ちとともに、生きていくことへの喜びを感じとれます。厳しかった冬の寒さが終わり、暖かな日差しとともに木々は芽吹き、花々が咲くこの季節。本展では、心温まる作品の中から代表作品や近作を含む約80点を展示しています。ぜひ、ご覧ください。(企画展案内チラシより)
5月29日(日)まで。お問合せは富弘美術館へ 0277-95-6333

富弘美術館を囲む会会員募集中

富弘美術館では、「富弘美術館を囲む会」の令和4年度会員を募集中です。年会費1,000円で会員カード(苺)が届き、年間何度でも無料で入館できます。さらに、年に4回送られてくる季刊誌は美術館情報満載です。
入会申込みは富弘美術館、または足利屋へ。



小耳にはさんだ

いい話 (文責・繪) 《320》

掃除を通して心の荒みをなくし、世の中をよくすることを目標として活動を続けている「日本を美しくする会」の情報紙『清風掃々』に宮城県多賀城市の小畑貞雄さんの手記が載っていました。小畑さんは東日本大震災の津波で家財道具が流され、不便な生活を強いられていたにも拘わらず、五百人の被災者が生活していた体育館のトイレ掃除をたった一人で続けてきました。「平日は仕事が終わったあとの四時間、そして週末は午前の昼にかけて、毎日トイレ掃除をさせていただきました。

人間の一生

多くのボランティアの方が来られました。残念ながらトイレ掃除と一緒にしますという人は一人もいませんでした。避難所生活が続く中、他の避難所では感染症が起きました。この体育館では感染症の発生はありませんでした。十日末に避難所が閉鎖されるまで、一日も欠かさず続けてきました。と十一年前のあの頃を振り返っています。そんな小畑さんが大好きな言葉が森信三先生推奨の「人間の一生」という言葉だそうです。

人間の一生

職業に上下もなければ貴賤もない。世のため人のために役立つことなら、何をしようと自由である。

世界一小さな 足利屋 トイレ美術館

今月の油絵《320》

吉田穰さん『島影』



足利屋の店の近くに「吉田綿店」という布団屋さんがありました。店主の吉田穰(みのる)さんは商売の傍ら油絵を描き、大間々美術協会などで活躍されてきました。商売をやめた後は店を改修して「アトリエジェイ」という看板を掲げ、美術愛好家のサロンになっていきました。今は空家・空き店舗になっていますが地域活性化のためにも、その活用が期待されています。
今月、足利屋の休憩コーナーでは、吉田さんの『島影』、『山(足尾)』、『建物のある風景』などの油絵を展示させていただきます。



そして二十からでも三十までにはひと仕事できるものである。それから十年本気でやる。すると四十までに頭をあげるものだが、それでいい気にならずにまた十年頑張る。すると五十までには群をぬく。しかし五十の声をきいた時には、大抵のものが息をぬぐが、それがない。これからは仕上げだ」と新しい気持ちでまた十年頑張る。すると六十ともなれば、もう相当に実を結ぶだろう。だが、月並当の人間はこの辺で楽隠居がしたくなるが、それから十年頑張る。すると、七十の祝は盛んにやっているともらえるだろう。しかし、それか

大間々駅のトイレ掃除が千回を迎えた日、宮城県から仲間と一緒に駆けつけてくれた小畑さんの信念や生き方を見習って、私も七十歳からの十年を頑張りたいと思っています。

靖ちゃん日記

令和四年三月十八日(金)
戦国末期に大間々の町を開いた「大間々六人衆」の筆頭高草木家の土蔵の調査を行った。嘉永三年九月と書かれた太い梁が百七十年の風雪を支えてきた。梁に鴛鴦が吊ってあった。江戸時代、黒保根の星野長太郎家から奥方が嫁入りした時のものだという。天保九年、前橋藩主・酒井石見守の一行三百人が大間々に来た際、殿様が高草木家に泊まったという古文書の記述と裏付けるように「御本陣」と墨書された木札もあった。参加した「三方良し」の会員たちは皆、江戸時代の大間々の街に想いを馳せた。
毎朝四時に「暴れん坊將軍」を観ている。主人公は、松平健扮する八代將軍徳川吉宗。その時代の老中が前橋藩主酒井忠恭だった。暴れん坊將軍が最後に悪人を断罪する時の決まり文句は、「威敷ッ」。夕方遅く、愛妻と娘に任せ、きりの店に帰ってきた。「商売ッ」と斬り捨てられるかと心配した。

お陰様でこの春に古希を迎えます。明治時代から隣組で書き継がれてきた『不幸記録帳』という和綴じの文書には母・崎千代の最期が「昭和二十七年四月五日午後六時、男子を出産したるも産後経過思はしからず出血多量の為午後九時永眠せらる」と記されています。あの日以来、母の魂は私を護り続け、私は「母の分も一緒に生きていく」と思っています。『生きていくということ』は、誰かに借りをつくること。生きていくということは、その借りを返していくこと」と言った永六輔さんの言葉が思い出されます。



虹の架橋を検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百二十一号は令和四年五月一日(日)発行予定です。